The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	都市の場所における人の居方とそのデザインに関する研究
Author(s)	小林, 健治
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45890
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名　小林健治（こばやし けんじ）

博士の専攻分野の名称　博　士（工　学）

学位記番号　第　19535　号

学位授与年月日　平成17年3月25日

学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
工学研究科建築工学専攻

学位論文名　**都市の場所における人の居方とそのデザインに関する研究**

論文審査委員　（主査）
助教授　鈴木　毅
（副査）
教　授　柏原　士郎　　教　授　鳴海　邦碩　　助教授　木多　道宏

論文内容の要旨

本論文は、都市の場所に人（他者）が居ることを主題として、人の居方（ある場所に人が居る状況と周囲に発生する関係を取り扱う概念）とそのデザインから都市の場所を考察した。その主な視点は次の3つからなっている。

1. 設計者が場所での人の行為に対してどのようなことを意図してきたのか
2. 都市生活者が人（他者）が居る場面をどのように認識しているのか
3. 都市オープンスペースにどのように人が居るのか、他者とどのような関係をもつことができるのか

以下、各章の概要を示す。

1章では、都市の場所に対する問題意識、既往研究の整理を行い、本研究の位置付けを行った。

2章では、建築・都市計画者がパブリックオープンスペースを計画・デザインする際に、どのような人の行為、行動を意図してきたかについて、雑誌に掲載される文章に着目し、計画者が意図する人間－環境関係のキーワードの抽出、分類を行い、それらの時代的変遷、空間構成との関係、建物用途との関係を明らかにした。

3章では、都市の中の人（他者）が居る場面に着目し、当事者の満足度ではなく、場所の価値を記述・分析するという新たな展開を目指した。具体的には、都市の中で体験することができる人が居る場面のうち、「都市の中の“いい感じ”に人が居る場面」を収集し、その場面から認識することができる、場所用途やいい感じに居る人の様子（人数構成、性別、姿勢、行為、背後環境の拡がり）の傾向を明らかにする。また、観察者がその場面をみたときに、いい感じだと感じた理由から、人（他者）が居ることによって認識することができる、さまざまな意味、価値について分類・考察し、人が居る場面からみた環境認識モデルを導き出した。

4章では、大阪中心部のパブリックオープンスペースの観察調査から、その場所の利用状況（利用人数、性別、人数構成、属性）について時間帯、場所毎の傾向を明らかにした。また、どのような場所に人が居るのか、その場所で体験できる他者との関係について、視線の向きに注目し、その傾向を明らかにし、利用状況や他者との関係など、人の居方を支えるデザインについて考察した。

5章では、各章の要約と本研究の総括、そして今後の課題を示した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、人の居方（ある場所に人が居る場面の状況と周囲に発生する関係や風景）に着目した、都市の場所ー特にパブリックスペースとそのデザインについての論考である。具体的には、設計者の考え方に関する文献調査、アンケートによる人の居る場面の収集とそれに対する認識の分析、更に実際の都市のオープンスペースの観察調査を通じて、都市の場所に人（他者）が居ることの意味とデザインのあり方について考察している。得られた結果を要約すると以下の通りである。

(1) パブリックオープンスペースのデザインコンセプトに関する文献調査から、設計者が、デザインにあたって、イベント、回遊、劇場、活動といったキーワードに代表される集団を想定した明確な行為に関する概念を特に重視していること、またこれらの概念と建物用途との関係および、時代的変遷を明らかにしている。

(2) 都市の中にいい感じに人が居る場面（観察する他者からもその状況を評価し共感できる場面）を写真撮影するアンケート調査の分析から、そのような場面には、水辺が多いこと、座っている場面と背後がオープンな場面が多いこと、また他者との関係が少ないこと、一人の場面や女性が対象となる場面が少ないことを明らかにしている。

(3) 更に、観察者がある場面をいい感じだと感じた理由の分析から、観察対象者や環境自体に関する読み取りに基づく理由以外に、観察者自身と場面の関係に関する読み取り、観察対象者と環境の関係に関する読み取りに基づく認識が存在することを明らかにし、人が居る都市の場所において多様で複雑な社会的認識関係が生じていることを示している。

(4) 大阪中心部のパブリックオープンスペース10箇所の観察調査を行い、利用状況（人数構成、属性等）、人が居る環境（セッティングとその背後環境）、他者との関係（視線の向きと距離）の各視点から考察分析し、それぞれの場所の特徴を位置づけるとともに、それを生み出している物理的セッティングを明らかにしている。

以上のように、本論文は、人が居る場所としての都市のパブリックスペースに関して、設計コンセプト、人々の場面への認識、利用実態調査と多角的な調査分析を行い、人間的な都市空間を設計する上での貴重な知見を提出しており、建築計画、都市計画の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。